義太夫

義太夫協会々報
第３４号
昭和60年５月20日
社団法人　義太夫協会発行
〒104　東京都中央区銀座
6—18—2 新橋演舞場Ｂ２
TEL　（541）5471

学校の鑑賞教材に義太夫節を

義太夫協会会長　吉川英史

去る四月十八日、芸団協主催のシンポジウム「伝統芸能の明日を語る」が、神宮外苑の日本青年館で行われた。

その中で伊藤松超氏が箏曲を主とした邦楽界の危機感を述べられたのは、極めて印象的であった。最近、楽器や楽譜の売れ行きが悪くなったし、特に入門者向き、初心者向きの楽譜の売れ行きが悪くなった。この二つのことは、箏曲へ入門する人が減少していることを裏書きするものであるというショッキングな話である。

伝統芸能の明日にとって改善すべきことは、音楽教育と家元制度とであるという結論になった。しかし、家元制度の問題は簡単に片付けられるものではなく、近い将来にこれをテーマにしたシンポジウムを開くべきであるという声が有力であった。そして、目下臨時教育審議会が教育改革に取り組んでいる際であるから、芸団協も臨教審に対し、音楽教育の改革――洋楽一辺倒の教育から、伝統音楽を重視した音楽教育への改革――を要望する請願書を提出することが決議された。（既に東洋音楽学会は研究者の立場から、この点に関する要望書を臨教審の各委員及び文部省に提出ずみである。）

◇伝統音楽の早期教育を

ところで、中曽根首相は「国際的関係からも、日本の伝統文化を大切にすることが必要である。」という。正にその通りである。日本が国際的に歓迎されるためには、欧米など諸外国と同じ文化、同じ芸術に同化することではなく、諸外国にない独特の文化・芸術を持ち、それを高めることである。そのためには、母国音楽である日本伝統音楽（邦楽）を、幼児教育から普及すべきである。知識教育と違って、音楽教育は高年齢からでは効果があがらない。昔から、邦楽を始めるのは、六歳（満五歳）の六月六日が良いという。六月六日はさておき、数え年六歳という幼児期から始めることが勧められているのである。いや、早ければ早いほどよい。栄養がよく、成長が早くなった現在、「三、四歳」と改めてもよいであろう。

（２頁に続く）

◇芸術教育と義務教育の一元化

邦楽の教育といっても、実は三つの問題がある。①普通教育（義務教育）における邦楽教育、②邦楽専門家（邦楽家）の教育、③普通教育に当たる音楽教師への邦楽教育、この三つの問題である。

②について、私は昨秋見聞したソウルのリトル・エンゼルス芸術学院が羨ましい。小・中・高の生徒が、この学院で、音楽や美術の特殊教育を受けると同時に、一般教育も受けられるのである。

日本では、国立の東京芸大に邦楽科があるが、高校までは学校では一般教育、邦楽の教育は別に町の師匠のけいこ場に通わねばならない。しかも一般教育の科目が不得手だと、芸大邦楽科の入学試験で振り落とされる。臨教審や文部省に望みたいことは、韓国のリトル・エンゼルスの制度の採用である。

◇音楽教師の教員免状制度の改正

現在の音楽教員の免状は、東京芸術大学の箏曲科や長唄科を卒業しただけでは与えられない。それらの卒業生が教員免状を貰うためには、ピアノの単位と合唱などの洋楽的声楽の単位を修得しなければならない。

ところが、洋楽の卒業生は、邦楽の単位は何一つ取らないでも音楽の教員免状が貰える。日本の学校の音楽教師であるのに……!!

このような音楽教師が、『指導要領』に指定されている邦楽の曲の鑑賞指導ができるはずがない。折角文部省が伝統音楽の教育を一歩進めてくれたと喜んだのは、ぬか喜びであった。

将来、音楽教員の免許状を取得するためには、洋楽だけでなく、必ず邦楽の単位も最少限取るように改正されるように提言する。

◇義太夫節の鑑賞教材の復活

私たちが関係して決めた中学校の音楽鑑賞教材には、三年生用として、義太夫「三十三間堂」の「木やりの段」が指定されていた。しかし、今は義太夫節はまったく学校教育から除外されている。除外された理由は、「中学生にはむずかしすぎる。」とか、「生徒が笑い出して、授業にならないから。」とかいうことである。

私に言わせれば、だからこそ義務教育の課程で、少くとも解り易い義太夫節の一曲くらいは鑑賞させるべきである。日本が誇ることのできる独特の声楽である義太夫節を一笑に付すような国民を作る学校教育!!　これが首相のいう「伝統文化を大切にする」教育といえるであろうか。「笑う」から放棄するのでなく、「笑う」生徒を笑わせないで感心させるのが、日本の教師の役目ではなかろうか。

私はかつてNHKの国際放送（ラジオ・ジャパン）で邦楽の解説放送を担当した。日本人の通念として、外国人に理解されるのは、せいぜい、箏曲を中心とする三曲、長唄、雅楽くらいのものだという考えがある。説明なしに聞かせる場合はそうかも知れない。しかし、説明をすれば誤解もとけ、感じ方も変わる。それに、日本の音楽はほとんど声楽であるが、それは歌い物と語り物とに二大別されている。その一方の語り物が理解されないで、どうして日本の音楽が理解されたといえようか。その語り物から一つを選ぶとなると、語り物の極地にあり、説明によって一層理解を深めることのできる義太夫節が最適である。こう考えて、私は国際放送にあえて義太夫節も加えて解説した。中学三年の鑑賞教材に「三十三間堂」の「木やりの段」を加えた理由も大体これと同じ考え方である。

ところで、芸団協のシンポジウムのあと、長唄の松島庄十郎氏からこんな話を聞いた。

――「外国で一番受けるのは、義太夫です。長唄や清元などかないっこないです。『勧進帖』よりも義太夫に感銘するのです。」と。

義太夫節を鑑賞教材として復活させることを、文部省に望みたい。

§§§§編集部から§§§§§

中学校の音楽鑑賞曲から「卅三間堂」が削除されることに対し「―略―軽減すべきは知識教育の詰め込み授業であって、情操教育は逆に増加すべきではありますまいか。―略―母国の文化を重要視する教育政策の後退、時代への逆行として、文部省当局の再考を」と、文部大臣あての意見書を提出したのは、52年7月22日のことでした。その後教育の世界、子供をとりまく環境は大きく変りましたが、私共の主張は変りません。全文は、会報13号（52年8月20日発行）に掲載されておりますので、この機会に是非もう一度お読み下さい。

御挨拶

義太夫節保存会会長　豊澤仙廣

義太夫協会会員の皆々様、お元気で義太夫を語っておいでになる事と喜んで居ります。

私、舞台を引退して二年間、この頃は世話係と言うも名ばかりで、ろくな世話も出来かねるのです。若い人の上達ぶりを我が事のように喜ぶのが私の役目で、本牧亭公演を待ちかねるこの頃になりました。役員の皆さんは吉川会長のお陰で協会の仕事に身が入り、過日の役員会でも只々感心するばかりでした。

長い年月、お客様が如何にしたら本牧亭にたくさんおいで下さるようになるかと、只そればかりで一所懸命、やりすぎもあり、いたらぬ事もありで、若さの元気一ぱいの仕事をこの頃思い出して、皆様にお詫びしたいとさえ存じて居ります。

すっかり若返った本牧亭のお客様、熱心に義太夫を聞いて下さる姿に、私は心で手を合わせて御礼申し上げて居ります。四月には土佐廣さんの油屋が出ましたが、楽屋には東京の有名な語り手がずらりと揃って大変に賑やかくなりました。五月、六月も出演すると、土佐廣さんの元気な言葉に安心致しました。

毎月二十日、二十一日の本牧亭公演をお忘れなくお引立、御後援下さる事を伏して御願い申し上げ、私の御挨拶とさせて頂きます。

仙廣賞（仮称）発足

―副賞に河野國声氏より十万円―

一月二十九日、新年会の席上、常任相談役河野國声氏より、本年から〝仙廣賞〟（仮称）を設置されたいとの御挨拶がありました。これは、いろいろな意味での年間功労者に対して贈られるもので、決定は理事会に委ねられます。「副賞として十万円を、今後毎年、暮にお届けする」と誠に有難いお申し出です。

賞の名称は、昭和十三年以来、四十七年に亘って仙廣師の仕事ぶりをつぶさに見てこられた國声氏が、仙廣師の功績を忘れてはならぬと〝仙廣〟の名を冠したもの。しかし、協会の運営にひとかたならぬ御支援をして下さる國声氏のお名前がないのはどうかとの意見もあり、「義太夫は国の声なり」と名づけられた國声のお名前と連名で、仙廣・國声賞がふさわしいのではとの意見も出ています。会員各位の御考えもお聞かせ頂ければ有難いと思います。名称の決定は、今のところ保留ですが、新しい賞の発足は誠に有難く、協会正会員の大いな励みとなることは必至です。

義太夫節と外国

＊オーストラリア女性による義太夫の論文

昭和五十一年秋には、吉川会長が日本音楽の講義を持ったこともあるミシガン大学からキミ・コールドレークさんという若い女性が女流義太夫をテーマにした博士論文執筆のため来日中です。「邦楽百選」にもチラッと登場しましたが、東京の義太夫の会にその姿を見ない日はない程、熱心に通っておられますので、御存知の方も多いかと思います。外国人による女義の論文とは前代未聞と、大変期待されています。

＊野澤錦鈴、アメリカでオペラに出演

三木稔氏作曲の新作オペラ「じょうるり」がアメリカのセントルイス・オペラ劇場で上演されるにあたり、若手のホープ、野澤錦鈴がその太棹部門を演奏することになりました。五月中旬～六月末日まで在米、従ってこの間本牧亭出演はありませんが、オペラへの初挑戦と帰国後の成長が嘱望されています。

＊'85猿之助訪欧歌舞伎

猿之助、門之助、段四郎、児太郎一行の訪欧歌舞伎に竹本の綾太夫、葵太夫、幹太夫、重松、時若、泰二郎が参加、四月末日～六月末日まで、イタリア、ドイツ、オランダ等を廻ります。この間、事務局長・綾太夫不在となる義太夫協会は痛手ですが、葵太夫、幹太夫、泰二郎と〝竹本講習〟卒業生が三名も加わっていることは、頼もしく、後に続く講習生の励みともなることでしょう。

女義のレコード

山中　豊

昨年は義太夫三〇〇年記念でいろいろの催しがあった。にぎやかな年で、新作義太夫節「蜆川」も女義に依って公演された。

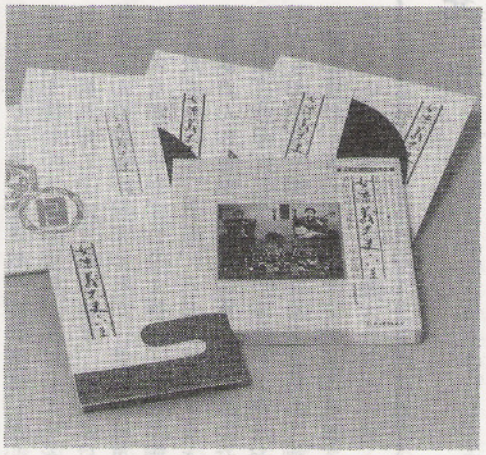
女義太夫のレコードの歴史を簡単に述べて見よう。明治末期より大正時代は非常に盛んで現在の歌謡曲の様に相当の数が発売され、複製盤が出るさわぎであった。此の時代はＳＰ盤で片面三分位の短いもので、今のＬＰ片面三十分位のものとは技術其の他で大分違っている。一段を吹込んだものはなく、二、三枚位でサワリを中心としたものが多かった。今日の様に一段全部を聞くなどとは考えられなかったのである。

昭和五十年頃になってから、コロンビヤで「女義太夫名演集」二枚組としてＬＰが出た以外は、阿波の神代初美と鶴澤友路が吹込んだＬＰが一枚ある位ではないかと思う。

今年一月にテイチクより「女流義太夫・いま」という四枚組が発売された。しかし、女義最年長者の団司が前回の「女義太夫名演集」に出演したが、今回の「女流義太夫・いま」に出ていないのがもの足りなく、関西の人が少ないのも残念に思われた。

しかし、じっくり聴いてみると、此のレコードは出演者の精進の賜で、実演では味わえない程のよい出来であった。他に録音技術のうまさが充分に発揮されていた。

「酒屋」寛八の三味線はやわらかな味と土佐廣の浄るりと相まって上出来、枕のうまさが出ていた。土佐廣のクドキはさすが人間国宝の貫禄を示した渋い語り口であった。



（テイチク株式会社提供）

「湊町」語り出しの商家の様子が友路の三味線でよく弾きあらわされていた。染登の後半の人情味あふるる語りは古風で申し分なかった。

「野崎村」は(前)朝重、(後)駒之助と分けて語っている。朝重は最近めきめきと腕を上げて来た。特に久作のセリフが結構なものでクドキの語りと絃の重輝がその場の情景を思う存分にあらわしていた。駒之助の浄るりは立派なものであった。

「鳴門」は綾之助・綾一、師弟で息の合った演奏だが、義太夫の妙味は、本来一人語りにあると私は信じているのだが。

「寺子屋」寛八は時代物と世話物（酒屋）を弾きこなした。しかし相当の古顔連中が居るにもかかわらず、これも掛合とは残念であった。

最近、無理な掛合が多い。例えば「阿古屋」「茶屋場」など始めっから掛合ものならその様に出来ているが、派手さを好むためか掛合にする。本牧亭では相当の年月、会を重ねているから、この際本格的な物に戻って、太夫と三味線の一対一の義太夫の良さを示した方がよいと思う。

今後も若手はじめ、皆揃って勉強し、立派な演奏を聞かせてもらいたい。

「女流義太夫・いま」お早めに

歌舞伎座前の〝文化堂〟ほか二、三の店を除いては、一般のレコード店の店頭には並んでおりません。協会でもお取次ぎいたしますのでどうぞお申込み下さい。宅配便にて御自宅までお届けすることも出来ます。

ＬＰ四枚組　一〇、〇〇〇円

竹本染登聞き書き

多田節子

一月にテイチクより発売された「女流義太夫・いま」で若々しく艶のある声をきかせてくれた竹本染登師、明治二十八年七月二十四日生れといいますから、まもなく満九十歳を迎えます。このほど染登師の御長女・多田節子氏のお骨折りによって、染登師聞き書きの原稿を頂くことが出来ました。土佐廣、仙廣、小仙、猿幸等ゆかりの各師の名前も登場、女流義太夫の歴史として貴重な資料となると存じます。（副題は掲載にあたり編集部でつけたものです）

染登師近影
（テイチク株式会社提供）

義太夫との縁

私も今年で九十歳になりました。長い人生の中で色々のことがありました。大勢の人とのめぐりあい、ふれあいをあれこれ想い出してみようと思います。

私は東区上汐町で生れました。母は二十七歳で弟を生んですぐ亡くなりました。兄が六歳、私が四歳の時でした。縁あって継母が来てくれて私達を大事に育ててくれました。生みの母のことは何にもわかりませんが、この母のお蔭でいまの私があることを感謝しています。母の実家は奈良法隆寺で十三代続いた造り酒屋でしたが、父親が判を押したばっかりに家は倒産して大阪へ出てくることになり、母の子供の頃は伯父さんの家の簾屋さん（南区の三休橋の傍）で小僧がわりに使われて、年頃になっても髪も結わして貰えずいつも男姿で働いたと申しておりました。その伯父さんの離れ座敷に名人の組太夫師がおられていつもお稽古をされているのを聞いて育ったお人でした。私の師匠の染太夫師の三味線を弾いていられた豊澤広作師（この方は腕の強い三味線の名人）が母の遠い親類に当ります。

私が舞も習いました、お琴もやりました、又その頃流行した一絃琴もやらされましたがどれも続きませんでした。けれど、母が大変な義太夫好きであったのと、義太夫を聴いて「これならやってもええわ」といったとかで広作師の処へ伺いテストを受けてから、染太夫師の処へ弟子入りをして染登となりました。

その頃は素人の家の座敷をかりて義太夫の会をやっておりました。私の家でも母が好きなものですから来て頂くことになり、千日前の「ぜんざい屋」さんの娘さんでよく語る子供さんが来て語ってくれました。それが小仙さんでした。この様な事で、本当に小仙さんとは古い幼な友達です。

師匠・染太夫師

朝五時に起きて六時には師匠の宅へ入らねばなりません。師匠は朝早くあみだ池と土佐の稲荷様へお詣りをされて、帰られてから四代目の住太夫師の掛け軸に向って拝まれておりました。私はわからないながらも同じ様に拝んでおりました。この度、文字大夫師が七代目住大夫を襲名されるにつき、ご挨拶のお手紙を拝見しましたら四代目住太夫師のことも書いてありまして、あの時拝んでいた掛け軸のお方だったといま思い出しております。今はすべて東京の空襲で焼いてしまいましたが、呂昇さんより頂いた「湊町」の本には住太夫師の印、染太夫師の印、呂昇さんよりの直筆で「貴女の師匠より頂いた本ではあるがいま又私より貴女に渡す」という意味の事をコマゴマと書いてありました。その本すべてを焼いてしまって本当に残念でした。

話が一寸それましたけど、染太夫師の処は大変におかみさんが優しいお人だったのを覚えています。師匠はお角力さんの出でありましたので大きいお方でした。朝は必ずお粥を召し上ります。お餅を一諸に巾のある乙の声が出るといってね。

女義の席

私が十六歳の時、初舞台を播重でやりました。その時分の播重へは東京より美光さん、朝重さんなどが語りにみえましたが、私の時は朝重さんがみえられて、私がドキドキ上っているのをみて、やさしく「そんな時はおひやを一杯のむといいのよ、落着きますよ」といわれたことを覚えています。団司さんも小住さんと一諸に出られました。小仙さんも一諸です。一昨年「女義の今昔」の時に播重の写真をお送りしましたが、あの中に皆さん写っております。あの写真は故吉田留三郎先生より頂いたものです。

私も「南歌久」へも出ました。播重へは呂昇さんがご自分の一座へ入れたい人を探しに見えておりました。実は、呂昇さんの「つぼみ会」をこしらえられた貫名俊一様を存じ上げておりましたので、その方を通じて是非とも入ってほしいと頼まれましたが、呂昇さん一座の金昇さんの三味線でといわれましたが、こちらにも三味線がありましたためその人をやめてまで呂昇さんの方へ行くという様なことは私には到底できませんのでお断りしました。結局はご縁がなかったのでしょうね。播重も一度火事で焼けて建て直した後は、浪花節の人達と一諸に興行するということになったので、やはり女の子が男の人達と一諸ではいけないという親の意見もありましたので、それからは私は出ませんでした。

巡業

十七歳の頃、小三さんと一諸に北海道へ巡業に行きました。この頃は、神戸の楠公神社の傍の寄席へも語りに行きました。大阪から通うのはしんどいからと、二、三ヶ月神戸で家を借り、母がついて来てくれていました。いまの土佐廣さんが伊達子と仰言っている時代です。御一諸したんですよ。昨年、神戸で文楽の人形と合同の会をした時、七十年前の女義太夫のことが記事として残っていると聞かされてなつかしいことでした。

大正二年頃に昇之助さん、東広さん、私とあと何人かで松竹の手で北陸の方へも巡業に行きました。大正三年に博多は小倉の常盤座に出演した時にファンから頂いた手紙が兄の家に残っておりました。毛筆で候文の批評です。御一諸した方達は、源昇さん、長司さん、数千賀さん、久國さん、組之助さん、長広さん、一人一人に御丁寧に書いてありました。

大正五年に染太夫師が亡くなられて叶太夫師（後の春太夫師）に預けられました。その頃、東京のバテー館のホノベさんから出演の交渉があり、此助さん、此太郎さんの後へ、春瀧さんと染登の二枚看板で来て呉れと話がありました。春瀧さんは二ヶ月で帰られましたけど私は残り四ヶ月おりました。その時の三味線は文両さんでした。この年の秋に二代目長広さんと仙平さんと一諸に九州へ巡業です。その時は仙廣さんもご一諸でした。誰方の三味線だったかは忘れました。

京都の勢国館へも新六さんの三味線で語りに行きました。土佐廣さんも綱助さんも、皆さん一諸でした。綱助さんというお人は、お人形のような人で、真赤な高座布団に三味線を持って座った姿は本当に美しかったです。やわらかいよい三味線でした。

大正十二年に北海道へ染登の真打で久國さん、仙廣さんとご一諸でしたが、青森へ渡って来た時に芝居がかかっていましたので弘前へ行って、この場所で東京の震災に遭い、まっすぐ帰られず新潟の方へ廻り、罹災者の方達と一諸でようよう梅田へ着いた時はドロドロの姿でね、とにかく大変なことでした。九月一日が来ると、その時のことが想い出されます。

稽古

叶太夫師の処へ預けられてより友次郎師の処へお稽古に行くことになりました。私は阿呆正直なので表階段から最初に上っていったので裏階段のあることを知らずにおりました。朝は例のごとく早い者勝ちで、一足でも早く師匠の宅へ入った者は先にお稽古をして頂けるのですけど、それも御連中様が済んでからで、芝居へ行かれる時間がくればその日はお稽古はお休みです。十数年というもの、どんな寒い日でもフトンは敷けずそのまま座り続けて御連中様のお稽古を聴いておりました。時々、染登は聴いているかと睨まれることもあり身体を堅くしてじっと聴いておりました。

私達のお稽古は聞かせて頂けるのは三回だけ、もう次には語らねばなりません。今の様

にテープがあるわけでなし、必死のお稽古でした。その間にも他の文楽の師匠の処へお稽古に行っておりました。この間の勉強が後々の私の芸のためになりました。有難いことだと思っております。三十代、四十代、五十代とこの間の人生の経験が又芸の上に力を加えます。苦労もすべてが芸の上に生きてきます。

友次郎師のお宅も後できけば、裏階段の下では文楽の若手の小庄さん、友駒さん、福太郎さんなどがチョボ焼きをやいて待ってはったと後で知りました。皆さん十五、六歳の子供さんでしたものね。この淡路町の師匠宅の帰りには師匠の高弟の友造さんと小仙さんと私の三人で三越の食堂へ食事に行きました。二人ともよく喰べるのに私は胃が悪くて喰べられず、いつもカステラばかり喰べていたので、しまいに二人から「ワテ、カステラ」という仇名をつけられてしまい、まともに名前を呼んではくれなくて「ワテ、カステラが来た」といわれるようになりました。

上　京

家庭の事情で昭和四年に上京することになり湯島天神の切通し上ったところの、今でもありますでしょうか、大きな白い鳥居の傍へタバコの店を持ちました。

上京した時は清一さんで語りました。清一さんの伝手で加賀百万石のお殿様の前田様のお屋敷が駒場に新築されました時、お祝いに語りに来てほしいと頼まれ、髪も丸髷か束髪とのことでしたが、丸髷では一寸具合が悪いので私も生れて初めてウェーブを出した束髪に結って貰って出かけました。〝日吉丸・御殿〟ともう一つあったと思いますが忘れました。とにかく少しづつ三つ語りました。何しろ今の時代と違って昭和の初めですから大変でした。座布団も敷けないのを、布団の上に赤の毛氈をのせて向うから見えないようにして頂くなど、おやさしい心配りをして頂きました。宮様が何人かおみえになっておられました。すんでから「染登さん一寸」と声をかけられ廊下に出ましたらお殿様がみえられて「ヤ、御苦労であった」と労をねぎらって下さいました。その廊下にはお能の衣裳の素晴らしい立派なのが二枚飾ってあった事を覚えています。

✽

清一さんとこうして御一諸していましたが、東京風と大阪風との芸の違いからイキの合わない時もありましたので、清一さんよりここに若いとても芸熱心な人があるからと人を介して紹介されたのが猿幸さんでした。たしかその時二十三か四歳でした。お行儀がよくてめったには余計な口をきかない人で、相手を尊敬して姉さん姉さんと立ててくれて、必ず下座にすわるお人でした。この猿幸さんについていられた方が木内延さんという大変芸熱心な女の方で、いつも二人の芸の批評をして下さいました。私が初めて上京して知らない土地で肩身のせまい思いもせずに芸をやれたのもこの人のお蔭です。染登・猿幸として長い間やってきました。

又清一さんの紹介で木挽町の辨松さんの玉井仙太郎様と知り合いまして、娘さんのお稽古をするようになりました。松竹の井上様、吉田三好様、玉井松楽様外の方達で「五声会」という会を作られて、その頃猿三郎様ともお知りあいになりました。先日の会報で、松岡語松様のお元気なお姿を見て、たしか五声会にもお出になっていたと思い、なつかしく存じました。

放　送

大阪のＢＫが上本町九丁目にあった時に義太夫の「さわり集」というのを私が初めて語りました。ＢＫの人にも「さわり集の元祖です」といわれたこと覚えております。その後九丁目から三越へ行き、大手前へと変っていきました。東京の時も愛宕山にあった頃から出ています。ある時〝質店〟を友造さんと一諸に放送しましたが、男では都合が悪いからと「友子」と変えて語ったこともありました。

鸚鵡会

昭和十年代には素女さんが大変活躍されておりました。素女さんの若い時は大阪の舞台でも私はご一諸しました。あの方も大勢のお弟子さんがいらっしゃいましたが、今では素八さんお一人になってしまったときました。松竹の大谷社長さんが御贔屓で、芝居小屋で素女会を度々催され、又飛行館でもよくおやりになっておりました。

そのうち私方の御連中様の森多吉様という

祖先祭寸感

渡辺　兼佐

義太夫の菩提寺超願寺は天王寺にあるが未だ詣ずるの機を得ない。

幼少時に多少あった回向院周辺の記憶は喪失したが由緒ある寺院に於ける三百年祭記念法要に参加しての感銘は深い。

竹本義太夫に関しては会報所載吉川会長の「竹本義太夫の人と芸」上下によって詳らかですが輝しい業績を残し惜しくも他界、爾来三百年数多輩出の名人上手の努力研鑽が結実して義太夫浄瑠璃が吾邦音曲史上に君臨する事久しい。近時文楽人形浄瑠璃をはじめとして古典芸術孤塁の一廓をなす義太夫協会に対しても識者の御努力結集の下に国家助成の手が差し延べられるようになってきたは真に同慶の至りで継承者各人の責務は重大と言へる。

正会員各位の芸道練磨探究はもとより協会当事者は若き年代層の真諦の理解愛好者の獲得充実により一層御努力願いたい。

人が人を動かす事言うは易く実際は難事業ですが。

（義太夫協会参与）

祖先祭に思う

和田　博

この世の名残り　夜も名残り

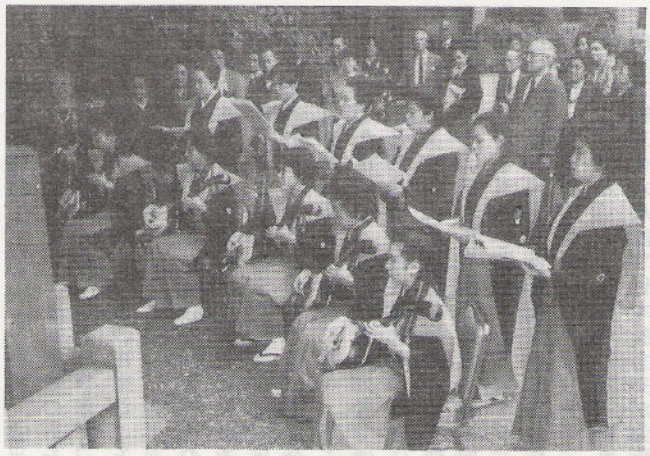
――南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

義太夫節三百年の今年、竹本義太夫師の墓前に捧げる「曽根崎心中」天神森の段。境内に響き渡る太棹の音色、女流若手総出演による心のこもった演奏をしみじみと聴く。誠に意義深い企画であった。ここ回向院に眠る祖師義太夫はじめ多数の義太夫関係先亡諸霊も共に聴かれ、さぞ喜ばれたことであろう。

祖先祭には、ここ四、五年毎歳参加させて戴いている。猿三郎師の会報記事によると、もう随分永い伝統がある由。今後も決して法灯を絶やさないでほしい。祖先祭の期日は、昨年から実施の十月が適切と思う。誰でも皆が忙しいのは同じこと。

三越劇場記念公演の新作「蜆川」竹本義太夫物語と、邦楽界の至宝である吾等の土佐廣師の「恋十」が待たれる。今後の斯道一層の飛躍の為にも皆の力を結集し成功させよう！

59・10・21記（義太夫協会参与）



墓前奉納演奏　59年10月10日（和田博氏撮影）

'85都民芸術フェスティバル

第15回　邦楽演奏会

※昭和60年3月10日（日）

※於第一生命ホール

※一、五〇〇円（東京都助成特別料金）

邦楽連合会主催・東京都後援

昼の部（12時30分開演）

浄瑠璃　竹本土佐廣

生写朝顔話　三味線　鶴澤　寛八

宿屋の段　琴　豊澤　幸治

夜の部（4時30分開演）

お里　竹本駒之助

維盛　竹本朝重

義経千本桜　若君　竹本越孝

鮓屋の段　御台　竹本綾之助

三味線　鶴澤　重輝

清元・古曲・新内・常磐津・長唄・三曲そして義太夫、邦楽界あげての一流演奏陣が出演するこの会も、すっかりお馴染みになりました。

※お申込み、お問合せは事務局まで

方が、皆さんあの様に会をこしらえてやっているから師匠も一つ会を作ってはどうかと仰言って、それなら幼な友達の小仙さんもいることだし東西で行き交う様な会にしたく、お互に勉強をしようと話がはずみ、土佐廣さんと、同じ友次郎門下の春華さんも誘って、もう一人、綱造先生より名前を頂いた綱昇さん（現在宮内ほくろさんの奥様）とこの五人で昭和十六年八月九日に築地小劇場で第一回をやりました。友次郎師が昔の本の「鸚鵡が杜」というのから取って「鸚鵡会」と命名して下さいまして、東京・大阪・京都とやってまいりました。この写真は十七年春、京都の華頂会館でやった時のものです。この中で舞台に上っているのは土佐廣さん、春華さんと私だけになりました。

前列右から　染登、叶太夫、友次郎、小仙、後列右から　綱昇、土佐広、綱助、猿幸、清芳、春華の各師（昭和17年春）

この会をやって下さる御連中様に九里四郎先生と仰言る方がいらっしゃいまして、志賀直哉先生とお友達の方でございました。戦争中南昌で亡くなられた南郷小佐の叔父様に当る方です。そのお友達に文士の先生方が大勢いらっしゃいまして、この会の後援会を作って大きくやることになっておりました。又、お客様として来て頂いた方の中に富崎春昇先生もいらっしゃいましたが、それも空襲のため駄目になりました。日本橋倶楽部でやった時には柳原伯爵様もおみえでした。

何回目かの「鸚鵡会」の時、春華さんの三味線の清芳さんが来られなくなり急に猿幸さんに弾いて貰うことになりました。語り物は〝中将姫〟です。三味線の手が違いますが一夜にして友次郎師の手を覚えて替えて舞台で弾いてしまわれたのには感心しました。友次郎師も女にしておくのは惜しい人と仰言ったほどです。三生さんとは共によい競争相手で、このお二人は本当に良い三味線でした。戦後大阪の大槻能楽堂で素人さんの会があった時に弾いて見えられた時きかせて頂きましたがホレボレする様な三味線でした。お二人とももっと長生きしてほしかったです。

帰阪

その内に空襲もひどくなるし、上京してから娘は病気で足を患いました。母も看護疲れで亡くなりますし、母子二人で何とも出来ずとにかく母の法隆寺へ逃げました。荷物は全部焼けてしまい無一物になりましたけれど、命だけ助かったこと喜こんでおります。そして二十年の暮に現在の処へ落着きました。今も三月の大空襲のニュースを見るたびに二人とも身体に傷もなく、怖いものも見ずによく出られたと当時を想い出しております。

帰ってから小仙さんと一諸に京都の友次郎師のお宅へ、今度は二人で泊り込みでのお稽古です。私が〝九段目〟小仙さんが〝吉田屋〟を昼夜二回のお稽古をして頂きました。今は物が充分過ぎるくらい何でもありますが、当時は食料も苦しくてサツマ芋の芋粥が大変美味しかったことも忘れられない一つです。

二十六年に友次郎師が亡くなられましたので寛治師にお稽古をして頂くことになりました。丁度その頃三蝶さんが一生懸命で女義を盛んにするため頑張っていられました。この方は一、二、三の揃ったよい声をしていられ何でもご自分で足を運んで仕事をするお人でした。興行をして大勢のお客を入れる実力のある方でした。友路さんとは二十七年の時よりのおつきあいですが、大変忙しい身体です。とにかくお互に身体にだけは気をつけて元気で語ってゆきたいと思っております。想い出すままに話してきましたが、あっちへ行ったりもどったりで読みづらいとは思いますけどどうぞ御辛棒下さい。

×××××××××× 新入会員御紹介 ××××××××××

[redacted]

×××××××××××× 住所変更 ××××××××××××

[redacted]

訃報

■鶴澤英治師（正会員）60年1月23日逝去
竹本（歌舞伎義太夫）の三味線奏者、英治師が、本号に三味線のことを書いて下さるという約束を果たせぬまま、遂に帰らぬ人となりました。義太夫界、歌舞伎界にとって大きな損失で誠に残念なことでした。

■斉藤義勝氏（特別会員）60年2月27日逝去
大阪の素義として活躍され、若手の育成にも大変理解を示して下さいました。

■岡副鉄雄氏（新橋演舞場社長・料亭「金田中」会長）60年5月12日逝去
義太夫協会が演舞場という一等地に事務所を置くことが出来たのは、偏に岡副氏の義太夫節にたいする御理解と御後援の賜でありました。協会のそして日本文化の大恩人を失ってしまいました。
御冥福を心からお祈り申し上げます。

編集後記

伝統文化が片隅においやられている今日でも、否だからこそ自国の文化の源をさぐりあてるものなのでしょうか。義太夫教室（第38期、5月24日開講）に、既に若い人ばかり、38名の申込みがきています。演奏者の養成も大切ですが、支えて下さる方がなくては何にもなりません。〈伝統の明日〉のためにこの会報が少しでもお役に立てれば幸いです。御意見、御投稿をどうぞお寄せ下さい。